

**IBM InfoSphere DataStage and
QualityStage**

バージョン 11 リリース 3

**アドミニストレーター・
クライアント・ガイド**



**IBM InfoSphere DataStage and
QualityStage**

バージョン 11 リリース 3

**アドミニストレーター・
クライアント・ガイド**



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、41 ページの『特記事項および商標』に記載されている情報をお読みください。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC19-4254-00
IBM InfoSphere DataStage and QualityStage
Version 11 Release 3
Administrator Client Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1997, 2014.

目次

第 1 章 アドミニストレーター・クライアントとは?	1
誰がアドミニストレーター・クライアントを使用できるか?	1
アドミニストレーター・クライアントから実行できることは?	1
第 2 章 アドミニストレーター・クライアントの使用法	3
アドミニストレーター・クライアントの開始	3
アドミニストレーター・クライアントの説明	4
InfoSphere Information Server エンジンのタイムアウトの設定	4
InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行	5
第 3 章 プロジェクトの管理	7
プロジェクトの追加	7
プロジェクトの削除	8
プロジェクトの移動	8
プロジェクトの移動	9
第 4 章 プロジェクト・プロパティの設定	11
「全般」ページ	11
ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化	12
パラレル・ジョブのランタイム列伝搬を有効にする	13
内部参照情報の編集の有効化	13
コネクターからのメタデータのインポートの制御	13
プロジェクトのプロテクト	14
環境変数の設定	14
プロジェクト・レベルでのオペレーショナル・メタデータの生成の使用可能化 (パラレル・ジョブおよびサーバー・ジョブ)	16
ワークロード管理キューの設定	17
「許可」ページ	17
InfoSphere DataStage ユーザー・ロール	19

InfoSphere DataStage ユーザー・ロールの割り当て	19
オペレーターに対するジョブ・ログ・エントリーの表示の変更	19
InfoSphere Information Server エンジンでのトレースの有効化	20
スケジューリング・ユーザーの指定	21
メインフレーム情報の提供	21
「チューニング」ページ	23
Hashed File キャッシング	23
行バッファリング	24
「パラレル」ページ	24
「シーケンス」ページ	25
リモート・システムにデプロイ	25
「ログ」ページ	26
ジョブ・ログ・ファイルのパーズ	27
第 5 章 プロジェクトの NLS の構成	29
プロジェクト・マップの変更	29
サーバー・ジョブのプロジェクト・マップ	30
パラレル・ジョブのプロジェクト・マップ	30
プロジェクト・ロケールの変更	30
サーバー・ジョブのロケール	30
パラレル・ジョブ・ロケール	31
クライアントおよびサーバーのマップ	32
付録 A. 製品のアクセシビリティ	33
付録 B. IBM の窓口	35
付録 C. 製品資料へのアクセス	37
付録 D. 製品資料に関するフィードバックの提供	39
特記事項および商標	41
索引	47

第 1 章 アドミニストレーター・クライアントとは?

IBM® InfoSphere® DataStage® アドミニストレーター・クライアントを使用して、単一 InfoSphere DataStage 上にある個々のプロジェクトの管理用タスクを実行します。

アドミニストレーター・クライアントは、Web クライアント・ベースのスイート・アドミニストレーターに応じて存在します。「スイート・アドミニストレーター」ハイパーリンクをクリックすることによって、アドミニストレーター・クライアントの内部からスイート・アドミニストレーターを開くことができます。

誰がアドミニストレーター・クライアントを使用できるか?

アドミニストレーター・クライアントのすべての機能を使用するには、スイート・アドミニストレーター内にアドミニストレーターとしてセットアップされている必要があります。

(InfoSphere DataStage ユーザーとしてセットアップされている場合は、アドミニストレーター・クライアントを開くことができ、情報を表示して、管理機能以外の特定の機能を実行できます。)

アドミニストレーター・クライアントから実行できることは?

IBM InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアントは、InfoSphere DataStage プロジェクトのいくつかの管理タスクを実行するために使用されます。

アドミニストレーター・クライアントでは、以下のタスクを実行できます。

- InfoSphere DataStage プロジェクトの追加、削除、および移動 (プロジェクト管理を参照)
- プロジェクトのユーザー許可のセットアップ (プロジェクト・プロパティを参照)
- ジョブ・ログ・ファイルのパージ (プロジェクト・プロパティを参照)
- InfoSphere DataStage エンジンのタイムアウト間隔の設定 (アドミニストレーターの使用を参照)
- InfoSphere Information Server エンジン・アクティビティのトレース (プロジェクト・プロパティを参照)
- ジョブ・パラメーターのデフォルトの設定 (プロジェクト・プロパティを参照)
- アドミニストレーター・クライアントからの InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行 (アドミニストレーターの使用を参照)
- ライセンス詳細の確認 (アドミニストレーターの使用を参照)

これらのタスクはすべて、個々の InfoSphere Information Server エンジンのインストールに関連します。

第 2 章 アドミニストレーター・クライアントの使用法

以下のトピックでは、アドミニストレーターの開始方法と基本的なタスクの実行方法を説明し、高度なタスクの詳細情報がどこに記載されているかを示します。

アドミニストレーター・クライアントの開始

IBM InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアントは「スタート」メニューから開始および構成できます。すべての IBM InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアント機能を使用するには、最初に自身を DataStage アドミニストレーターとして指定する必要があります。

手順

1. 「スタート」メニューから、「**IBM InfoSphere Information Server**」 > 「**IBM InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター**」を選択します。
2. 管理する InfoSphere Information Server エンジンが属するサービス層のホスト名を指定します。
3. 管理する InfoSphere Information Server エンジンが存在するコンピューターのホスト名を選択します。
4. 指定されたドメインに接続するための「**ユーザー名**」と「**パスワード**」を指定します。すべてのアドミニストレーター・クライアント機能を使用するには、Web コンソールの「アドミニストレーター」タブで、DataStage アドミニストレーターとしてユーザーを指定しておく必要があります。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. サーバーからのセキュリティー証明書がトラステッドではないというメッセージが表示された場合、証明書を受け入れます。
 - a. セキュリティー証明書を表示するには、「**証明書の表示**」をクリックします。
 - b. 「**証明書のパス**」タブをクリックして、ルート証明書を選択します。
 - c. 「**全般**」タブをクリックします。
 - d. 「**証明書のインストール**」をクリックしてから、「**次へ**」をクリックします。
 - e. 「**証明書をすべて次のストアに配置する**」を選択します。
 - f. 「**参照**」をクリックして、「**信頼されたルート証明機関**」を選択します。
 - g. 「**次へ**」をクリックしてから、「**終了**」をクリックすると証明書がインポートされます。

アドミニストレーター・クライアントの説明

アドミニストレーター・クライアントは、エンジン全体のプロパティを設定して、プロジェクトを管理するために使用されます。

アドミニストレーター・クライアントには、3 つのタブ付きページがあります。

- 「全般」ページを使用して、エンジン全体のプロパティを設定します。このページは、少なくとも 1 つのプロジェクトが存在する場合にのみ使用できます。エンジン全体のプロパティは、次のとおりです。
 - 無応答タイムアウト (InfoSphere Information Server エンジン・タイムアウトの設定を参照)。
 - NLS クライアント/サーバー・マップ (このシステムで NLS が使用可能である場合) (クライアント/サーバー・マップを参照)。
- 「プロジェクト」ページには、InfoSphere Information Server エンジンが現在認識しているすべての InfoSphere DataStage プロジェクトがリストされています。このページを使用して、プロジェクトを管理します。ここから、次のことができます。
 - プロジェクトの追加と削除 (プロジェクト管理を参照)
 - プロジェクト・プロパティの表示と設定 (プロジェクト・プロパティを参照)
 - プロジェクトのデフォルトの文字セット・マップとロケールの変更 (NLS が使用可能である場合) (NLS の構成を参照)
 - InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを直接プロジェクトに発行する (InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行を参照)

プロジェクトが存在しなければ、「追加...」と「コマンド」ボタンのみが使用可能で、「コマンド」は InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを InfoSphere Information Server エンジン・アカウントに対して発行します。

InfoSphere Information Server エンジンのタイムアウトの設定

デフォルトの IBM InfoSphere Information Server エンジンのタイムアウト値を変更できます。

このタスクについて

デフォルトでは、InfoSphere DataStage クライアントと、Windows 上の InfoSphere Information Server エンジンとの接続は、86400 秒間 (24 時間) 無応答が続くとタイムアウトします。デフォルトでは、InfoSphere DataStage クライアントと、UNIX 上の InfoSphere Information Server エンジンとの接続はタイムアウトしません。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウで、「全般」タブをクリックして、「全般」ページを画面の前面に出します。
2. 「無応答タイムアウト」領域で、上矢印または下矢印ボタンをクリックしてタイムアウト時間を変更します。または、「秒」フィールドに新しいタイムアウト時間を入力します。

3. 無応答タイムアウトをしないようにするには、「タイムアウトしない」チェック・ボックスを選択します。
4. 「適用」をクリックして、新しい設定値を適用します。変更は、新規クライアント接続で即時に有効になります。

タスクの結果

アドミニストレーターの起動時に無応答タイムアウトが無効になっていた場合は、再び有効にするとデフォルトの 86400 秒に戻ります。

タイムアウトは、コマンド・ラインから発行される `dsjob -wait` コマンド、およびジョブ制御 API 関数 `DSWaitForJob` にも影響します。これらの機能を使用する場合は、タイムアウトを長く設定するか、タイムアウトを完全に無効にすることをお勧めします。また、タイムアウトはパラレル・キャンバスの共有コンテナにも影響します (`DSWaitForJob` を使用するため)。

アドミニストレータ・クライアントで設定されたタイムアウトは、IBM InfoSphere Information Server Web コンソールで設定されたセッション・タイムアウトの数値を上書きします。InfoSphere DataStage クライアントとエンジン間の接続は、Web コンソールで設定されたセッション・タイムアウトには影響されません。

InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行

以下の手順に従って、アドミニストレータ・クライアントから InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行できます。

このタスクについて

アドミニストレータ・クライアントを使用すれば、Telnet セッションを使用しないで、選択したプロジェクトから直接 InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行できます。

InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの LOGOUT、LO、QUIT、Q、OFF は、クライアントからは発行できません。

システムの NLS 設定を操作する InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行するときは十分注意してください。これらのコマンドを誤って使用すると、InfoSphere DataStage およびシステムのそのほかの部分に混乱が生じるおそれがあります。

手順

1. 「DataStage アドミニストレータ」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「コマンド」をクリックします。「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 実行する InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを「コマンド」フィールドに直接入力するか、「コマンド履歴」リスト・ボックスのコマンドをダブルクリックします。コマンド履歴から選択したコマンドは「コマンド」フィールドに表示され、そこで編集できます。

5. 「実行」をクリックします。コマンドが「**コマンド履歴**」リスト・ボックスに追加され、「コマンド出力」ウィンドウにコマンドの結果が表示されます。

コマンド出力は、最初のページの終わりで一時停止します。「次へ」をクリックすると、出力の次のページへスクロールします。ページングの設定をオフに切り替えるには、「コマンド出力」ダイアログ・ボックスの下部にある「**ページ終端で出力を一時停止**」チェック・ボックスの選択を外します。

6. コマンドにさらに入力が必要な場合は、「コマンド出力」ウィンドウに入力を求めるプロンプトが表示されます。コマンド出力表示の下にあるフィールドに応答を入力して、「**応答**」をクリックします。
7. コマンドの実行が完了したら、「**閉じる**」をクリックします。このウィンドウが閉じて、「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスが再表示されます。
8. InfoSphere Information Server エンジンの VOC ファイルにコマンドを保存する場合は、「**コマンド履歴**」リスト・ボックスから 1 つ以上のコマンドを選択し、「**名前を付けて保存...**」をクリックします。単一のコマンドは文として、複数のコマンドは段落として保存されます。文または段落の名前を「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスに入力し、「**OK**」をクリックします。

それ自体に対する呼び出しを含む文や段落は保存できません。

9. 「**閉じる**」をクリックして、「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスを閉じます。

第 3 章 プロジェクトの管理

InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアントを使用して、プロジェクトの追加、削除、および移動を行うことができます。

以下のトピックでは、次の処理の実行方法を説明します。

- 新規 InfoSphere DataStage プロジェクトの追加
- プロジェクトの削除
- プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを削除する際は、確実にライセンス情報が正しく更新されるように、必ずアドミニストレーター・クライアントを介して実行してください。

プロジェクトの追加

必要に応じて、アドミニストレーター・クライアントからさらにプロジェクトを追加できます。

このタスクについて

新規プロジェクトを追加するときに、新規プロジェクトが既存のプロジェクトからユーザーとユーザーに関連付けられたロールを継承するように指定できます。

また、新規プロジェクトのプロテクトも指定できます。これはプロジェクトの特別カテゴリであり、通常はプロジェクト内での追加、削除、変更はできません。ユーザーはプロジェクト内のオブジェクトを表示でき、ジョブのデザインではなくジョブの実行方法に影響を与えるタスクを実行できます。具体的には次のことができます。

- ジョブの実行
- ジョブ・プロパティの設定
- ジョブ・パラメーターのデフォルト値の設定

新しく作成したプロテクトされたプロジェクトは、作成されたジョブおよびコンポーネントをインポートすると設定されます。このインポートを実行できるのは製品マネージャー・ロール、またはアドミニストレーター・ロールを持つユーザーのみで、それ以外のタイプのユーザーは特別なプロジェクトへのインポートはできません。(既存のプロジェクトをプロテクトするには、「プロジェクト・プロパティ」ダイアログ・ボックスを使用します。プロジェクトのプロテクトを参照してください。)

プロジェクトをプロテクトすると、「実動」環境下で実行予定のジョブ、すなわち完了したジョブの整合性を維持できます。製品マネージャー・ロールまたはアドミニストレーター・ロールに幅広いアクセスを認めると、プロジェクトをプロテクトすることで得られるメリットがなくなります。

プロジェクトを追加するための InfoSphere DataStage アドミニストレーター・ロールに加えて、管理している InfoSphere Information Server エンジンが存在しているコンピューターに関して、正しいオペレーティング・システム・アクセス権も必要です。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. 「追加...」ボタンをクリックします。「プロジェクトの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. プロジェクト名を「名前」フィールドに入力します。入力した名前は、新しいプロジェクトのデフォルトの場所に自動的に付加されます。

既に存在する場所にプロジェクトを追加することはできません。

4. デフォルトの場所を変更するには、「ホスト上の場所」フィールドに新しい場所を入力するか、「参照...」ボタンをクリックして新しい場所を選択します。
5. プロジェクトをプロテクトされたプロジェクトにする場合は、「プロテクトされたプロジェクトを作成」チェック・ボックスを選択します。
6. 新規プロジェクトにアクセスできるユーザーとそのユーザーのロールを既存のプロジェクトからコピーする場合、「既存のプロジェクトからロールをコピーする」を選択したあと、コピー元のプロジェクトをリストから選択します。
7. 「OK」をクリックします。

プロジェクトの削除

InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアントを使用して、プロジェクトを削除できます。

手順

1. 削除するプロジェクトに接続しているユーザーがないことを確認してください。別のユーザーが接続しているプロジェクトを削除しようとすると、InfoSphere DataStage からエラー・メッセージが返されます。
2. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
3. 削除するプロジェクトを選択して、「削除」をクリックします。
4. 削除の確認を求めるメッセージが表示されます。確認すると、プロジェクトは直ちに削除されます。

プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを移動するには、まずそのプロジェクトをファイルにエクスポートしてから、新しい場所にインポートする必要があります。

その後、アドミニストレーター・クライアントを使用して、元のプロジェクトを削除する必要があります。

この方法でプロジェクトを移動する前に、そのプロジェクト内のジョブが実行中でないことを確認してください。これを行うための最も簡単な方法は、InfoSphere DataStage ディレクターを開始し、移動するプロジェクトにアタッチして、現在実行中のジョブがないかどうかチェックすることです。

プロジェクトを移動するときに、環境変数設定やプロジェクト・オプションといったプロジェクト・レベルの設定は、含まれません。

プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを新しい場所に移動します。

手順

1. デザイナー・クライアントを開始して、移動するプロジェクトにアタッチします。
2. メインメニューから「**エクスポート**」 > 「**DataStage コンポーネント**」をクリックします。「リポジトリ・エクスポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「**すべて選択**」ハイパーリンクをクリックして、リポジトリ・ツリーのすべてのオブジェクトを選択します。
4. ドロップダウン・リストから、「**ジョブ・デザインと実行可能ファイルのエクスポート (該当がある場合)**」をクリックします。
5. 「**オプション**」ボタンをクリックして、「エクスポート・オプション」ダイアログ・ボックスを開きます。「**デフォルト**」 > 「**全般**」ブランチで、次を指定します。
 - ソース・コードがエクスポートされたルーチンに含まれることを指定する。
 - ソース・コードがジョブ実行可能ファイルに含まれることを指定する。
 - ソースの内容がデータ品質仕様に含まれることを指定する。
6. 「**エクスポートのタイプ**」として「**dsx**」を選択します。
7. エクスポート先のファイルを指定するか選択します。ファイルが存在する場合、「**ビュー**」ボタンをクリックしてそのファイルを表示します。ファイルは、Windows で指定された、このファイル・タイプのリポジトリ・ビューアー、または、「エクスポート・オプション」ダイアログ・ボックスで指定されたビューアーで表示されます。
8. 「**エクスポート**」をクリックして、指定されたファイルにプロジェクトをエクスポートします。
9. 既存のプロジェクトを移動したい場所に、必要な名前新しいプロジェクトを作成します (この説明は、プロジェクトの追加を参照してください)。
10. 作成した新しいプロジェクトにデザイナー・クライアントをアタッチします。
11. 「**インポート**」 > 「**DataStage コンポーネント...**」を選択します。「DataStage リポジトリ・インポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
12. エクスポートされたプロジェクトに使用したファイル名を入力します。
13. 「**すべてインポート**」オプションをクリックし、「**OK**」をクリックします。プロジェクトがインポートされます。

第 4 章 プロジェクト・プロパティの設定

特定のプロジェクト・プロパティを表示し、変更することができます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、「プロジェクト」ページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」ボタンをクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが表示されます。

タスクの結果

「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウの各ページを使用して、次のことができます。

- 「全般」。ディレクター・クライアントからのジョブ管理の有効化、パラレル・ジョブのランタイム列伝搬の有効化、プロジェクト全体のジョブ・ログの自動ページ設定の定義、環境変数の設定、コネクタ・インポート・ウィザードを使用したインポート時のメタデータの自動共有の有効化、およびオペレーショナル・メタデータの生成などを行います。
- 「許可」。InfoSphere DataStage ユーザー・ロールを表示したり、それらのユーザー・ロールを特定プロジェクトのユーザーおよびグループに割り当てます。スイート・ユーザー・ロールの割り当ては、IBM InfoSphere Information Server Web コンソールで行います。
- 「トレース」。InfoSphere Information Server エンジンのトレースの有効/無効を切り替えることができます。
- 「スケジュール」。スケジューリングされた InfoSphere DataStage ジョブの実行に使用するユーザー名とパスワードをセットアップします。「スケジュール」タブは、Windows サーバーにログオンした場合にのみ表示されます。
- 「メインフレーム」。メインフレーム・ジョブ・プロパティとデフォルト・プラットフォーム・タイプを設定します。このページは、メインフレーム・エディションがインストールされている場合にのみ表示されます。
- 「チューニング」。Hashed File ステージのキャッシュ設定を構成します。
- 「パラレル」。日時および数字フォーマットに関する、パラレル・ジョブのプロパティとデフォルトを設定します。
- 「シーケンス」。ジョブ・シーケンスのコンパイルのデフォルトを設定します。

「全般」ページ

「全般」ページを使用して、選択したプロジェクトのさまざまな機能を制御します。

ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化

アドミニストレーターは、アドミニストレーター・クライアントを使用して、ディレクター・クライアントでのジョブ管理機能を有効にしたり無効にしたりできます。

このタスクについて

これらの機能は、InfoSphere DataStage オペレーターに中断したジョブやハングしたジョブのリソースを解放させ、問題の原因が解決したらジョブを再実行可能な状況に戻します。デフォルトでは、これらの機能は無効になっています。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが現れ、「全般」ページが表示されます。
4. 「ディレクターでのジョブ管理を有効にする」チェック・ボックスを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

タスクの結果

この手順を実行することによって、ディレクターの「ジョブ」メニューで 2 つのコマンドが使用可能になります。

- リソースのクリーンアップ
- 状況ファイルの消去

「リソースのクリーンアップ」は、ディレクターの「モニター」ウィンドウのショートカット・メニューでも使用可能になります。「リソースのクリーンアップ」によって次のことができます。

- ジョブ・プロセスの表示と終了
- 関連するロックの表示と解除

「リソースのクリーンアップ」は、トレースとは互換性がありません (InfoSphere DataStage エンジンでのトレースの有効化を参照)。サーバー・トレースとジョブ管理を有効に設定した場合、「リソースのクリーンアップ」を選択すると、ディレクターはエラー・メッセージを表示します。

「状況ファイルの消去」を実行すると、選択したジョブのすべてのステージに関連する状況レコードが削除されます。したがって、ジョブ処理がまったく存在しないこと、またジョブが正しくリセットできないことが確実な場合にのみ実行してください。

これら 2 つのコマンドを使用すると、ユーザーはジョブ・リソースに対して多くの制御権を得てしまいます。使用する際は十分注意してください。

パラレル・ジョブのランタイム列伝搬を有効にする

ステージでランタイム列伝搬を有効にする前に、IBM InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーターからプロジェクト・レベルでパラレル・ジョブのランタイム列伝搬を有効にする必要があります。この機能を有効にすると、パラレル・ジョブ内のステージでは、ジョブ実行時に遭遇する未定義列を処理し、これらの列をジョブの残りの部分に伝搬できます。

このタスクについて

このチェック・ボックスを選択するとこの機能が有効になりますが、実際に使用するには、各ステージでオプションを明示的に選択する必要があります。この機能を有効にすると、次のサブプロパティーが利用できるようになります。

- **新規リンクのランタイム列伝搬を許可。** これを選択すると、新しいリンクを InfoSphere DataStage ジョブに追加する際にデフォルトでランタイム列伝搬が有効になります。選択しなかった場合は、ジョブのデザイン時に、ステージ・エディターのリンクごとにランタイム列伝搬を有効にする必要があります。

内部参照情報の編集の有効化

ステージ・エディターの列定義にある「表定義参照」フィールドと「列定義参照」フィールドの編集ができるようにするには、「ジョブでの内部参照の編集を許可」を選択します。

このタスクについて

これらの設定で、デザイナー・クライアントにおけるステージ・エディターの動作が決定されます。

これら 2 つのフィールドは、表定義、およびその表定義からロードされた個々の列を示します。これらのフィールドは、デザイナー・クライアントの「グリッド・プロパティー」ダイアログ・ボックスで各種設定を指定した時に、ステージ・エディターの「列」タブで有効になります。

コネクタからのメタデータのインポートの制御

「コネクタからインポートしたメタデータを共有」オプションを使用して、デザイナー・クライアントを使用してコネクタを通してメタデータをインポートするときに作成するオブジェクトを指定します。

このタスクについて

このオプションはデフォルトで選択されます。つまり、デザイナー・クライアントの中で「表定義のインポート」 > 「コネクタ・インポート・ウィザードの開始」コマンドを使用すると、表定義オブジェクトがプロジェクト内に、データ・コレクションが動的リポジトリ内に作成されます。その結果、他の Suite コンポーネントと他の DataStage プロジェクトは、動的リポジトリ内のデータ・コレクションにアクセスできます。このオプションはデフォルトで選択されます。オプションが選択されていない場合は、プロジェクト・リポジトリの表定義オブジェクトのみが作成されます。

プロジェクトのプロテクト

製品マネージャーまたはアドミニストレーターのユーザーである場合、プロジェクトをプロテクト・プロジェクトに変更することができます。

このタスクについて

プロテクト・プロジェクトは、プロジェクトの特別なカテゴリーであり、通常は、プロジェクト内での追加、削除、変更はできません。

注: 現在、UNIX システムでは、root または管理ユーザーのみがプロジェクトをプロテクトまたはプロテクト解除できます。

ユーザーはプロジェクト内のオブジェクトを表示でき、ジョブのデザインではなくジョブの実行方法に影響を与えるタスクを実行できます。

- ジョブの実行
- ジョブ・プロパティの設定
- ジョブ・パラメーターのデフォルト値の設定

製品マネージャー・ステータスのユーザーとアドミニストレーター・ステータスのユーザーは、既存の InfoSphere DataStage コンポーネントをプロテクトされたプロジェクトにインポートできます。

現在のプロジェクトをプロテクトされたプロジェクトに変換するには、「プロジェクトをプロテクト」ボタンをクリックします。変換の確認を求めるダイアログ・ボックスが表示されます。「OK」をクリックして続行します。「プロジェクトをプロテクト」ボタンは、「プロテクト解除」ボタンに変わり、必要に応じて、プロジェクトをプロテクトされていない状態に戻すことができます。

プロジェクトがプロテクトされた後、そのプロテクトを解除できるのは、製品マネージャーまたは管理者ユーザー (UNIX の root または管理ユーザー) のみです。オペレーターは、プロテクト・プロジェクトの環境変数を追加および修正することができます。

アドミニストレーター・クライアントでは、プロテクトされたプロジェクトは、プロジェクト名の後ろに「(プロテクト)」というストリングを付けて識別されます。

環境変数の設定

このページから、プロジェクト全体に対する一般的な環境変数のデフォルトやパラレル・ジョブに固有の環境変数を設定できます。

手順

- 新しい変数を指定することもできます。これらの変数すべてはジョブで使用できるようになります。ジョブに追加する方法はジョブ・パラメーターの場合と同じです。
- 環境変数を定義するには、「環境...」ボタンをクリックします。「環境変数」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - 左のペインのツリーから、デフォルトを設定する環境変数のタイプを選択します。使用できる変数のリストが右のペインに現れます。「値」列で、変数の新しい値を選択できます。

- 新しい変数を定義するには、「**ユーザー定義**」を選択します。変数の名前とデフォルト値を指定するためのダイアログ・ボックスが表示されます。また、ユーザー定義変数のタイプも設定できます。ストリング (デフォルト) または暗号化のどちらかを選択します。暗号化を選択すると、次に表示されるダイアログ・ボックスで暗号化ストリング値の入力と確認が求められます。
- プロジェクトからファイルに環境変数をエクスポートするには、「**エクスポート**」をクリックします。『環境変数のエクスポート』を参照してください。
- ファイルから環境変数をインポートするには、「**インポート**」をクリックします。『環境変数のインポート』を参照してください。
- 選択した環境変数に、インストールされているデフォルト値を設定する場合は「**デフォルトに設定**」をクリックします。
- 現在表示されているすべての環境変数に、インストールされているデフォルト値を設定する場合は「**すべてデフォルト**」をクリックします。
- 選択した変数のヘルプ情報を取得する場合は「**変数のヘルプ**」をクリックします。

環境変数の設定を変更すると、プロジェクト内のすべてのジョブが影響を受けます。特定のジョブの環境変数を変更する場合は、「**値**」列を空のままにし、ジョブ・パラメーターを使用して環境変数の設定値を指定します。

環境変数のエクスポート

IBM InfoSphere DataStage and QualityStage® アドミニストレーター・クライアントの「プロジェクト」ページからファイル (*.env) に、環境変数をエクスポートできます。このファイルを使用して、ファイルから他のプロジェクトに環境変数をインポートすることができます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、環境変数のエクスポート元のプロジェクトを選択し、「**プロパティ**」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. 「全般」ページで、「**環境**」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログで、「**エクスポート先ファイル**」をクリックします。
5. 「環境変数のエクスポート」ダイアログの、プロジェクト内のすべての環境変数が示されたツリー構造で、エクスポートする環境変数のチェック・ボックスを選択します。
6. 「**エクスポート**」ボタンをクリックします。
7. 環境変数をエクスポートする場所を尋ねるプロンプトが出されたら、エクスポート先のクライアントのパスを選択し、ファイル名を指定します。デフォルトのファイル名は **<project_name>.env** です。「**保存**」をクリックします。

環境変数のインポート

あるファイルの環境変数をプロジェクトにインポートすることができます。次に、インポートした環境変数をそのプロジェクト内のすべてのジョブに適用できます。

このタスクについて

あるプロジェクトの環境変数の値を変更またはインポートすると、その環境変数を使用するプロジェクトのすべてのジョブに新規のプロジェクト設定を適用できます。

環境変数をインポートする場合、次の規則がプロジェクト設定に適用されます。

- 同じ名前と同じ値を持つ環境変数の場合、アクションは行われません。
- 既存の環境変数と異なる名前を持つ環境変数の場合、プロンプトなしでインポートが実行されます。
- 名前が同じで値が異なる環境変数が既に存在する場合、値を上書きするかどうかを尋ねるプロンプトが出されます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、環境変数のインポート先のプロジェクトを選択し、「プロパティ」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. 「全般」ページで、「環境」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログで、「インポート元ファイル」をクリックします。
5. プロンプトが出されたら、使用する環境変数ファイル (*.env) へのパスを指定します。
6. 「環境変数のインポート」ダイアログの、ファイル内のすべての環境変数とその値が示されたツリー構造で、インポートする環境変数のチェック・ボックスを選択します。
7. 「インポート」をクリックして、選択した環境変数をインポートします。
8. インポートの完了時に表示されるレポートで、作成された環境変数、上書きされた環境変数、または影響を受けない環境変数のサマリーを確認します。「詳細」をクリックすると、展開されたインポート結果レポートが表示されます。この展開されたレポートには、予期されたフォーマットと一致しないために解析できなかった、ファイルのすべての行の情報も含まれます。

認識可能な環境変数定義がない場合、インポートは、ファイルに認識可能な環境変数定義がないことを示すメッセージを返します。

プロジェクト・レベルでのオペレーショナル・メタデータの生成の使用可能化 (パラレル・ジョブおよびサーバー・ジョブ)

IBM InfoSphere DataStage and QualityStage のサーバー・ジョブとパラレル・ジョブのオペレーショナル・メタデータの生成をプロジェクト・レベルで使用可能にできます。

このタスクについて

プロジェクトでジョブを実行すると、ジョブ実行と影響を与えるデータウェアハウス・リソースを記述したメタデータが収集されます。ジョブの実行後に、OMDMonApp サービスは、このオペレーショナル・メタデータをメタデータ・リポ

ジトリリーにインポートします。これを IBM InfoSphere Information Governance Catalog で分析して、Web コンソールでそのオペレーショナル・メタデータに関するレポートを表示できます。

ディレクター・クライアントでは、個々のジョブのプロジェクト・レベルの設定をオーバーライドできます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、オペレーショナル・メタデータを生成する対象のプロジェクトを選択し、「プロパティ」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. 「オペレーショナル・メタデータを生成」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

次のタスク

プロジェクトの中にあるジョブを実行するときにはいつでも、オペレーショナル・メタデータが生成されます。パラレル・ジョブおよびサーバー・ジョブの場合、InfoSphere DataStage and QualityStage ディレクターでジョブを実行する前に、デフォルトのプロジェクト・レベルの設定をオーバーライドできます。

ワークロード管理キューの設定

プロジェクトについてデフォルトのワークロード管理キューを設定できます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、環境変数のエクスポート元のプロジェクトを選択し、「プロパティ」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. プロジェクトについてデフォルトの「ワークロード管理キュー」を選択します。プロジェクトについてデフォルトのキューを指定しなかった場合、デフォルトのワークロード管理キューがキューを指定しないジョブに使用されます。
4. 「OK」をクリックします。

「許可」ページ

以下のトピックでは、InfoSphere DataStage ユーザー・ロールと、これらのロールのユーザーまたはグループへの割り当てを変更する方法を説明します。

ユーザーは、スイート・アドミニストレーター・ツールの中で、DataStage アドミニストレーターまたは DataStage ユーザーとして定義されると、InfoSphere DataStage にアクセスできるようになります。DataStage アドミニストレーターとして、DataStage ユーザーがプロジェクトにアクセスできるかどうか、またアクセスできる場合は、どのカテゴリーのアクセスができるかを定義できます。

また、スイート・アドミニストレーター・ツールを使用して、グループの追加、およびユーザーのグループへの割り当てを行うことができます。これらのグループにも、DataStage アドミニストレーターまたは DataStage ユーザーのロールが割り振られます。管理者グループに属するユーザーは、InfoSphere DataStage を管理できるようになります。DataStage アドミニストレーターとして、DataStage ユーザー・グループにプロジェクトへのアクセス権を付与し、ロールをグループに割り当てることができます。

ユーザーとグループを設定する際、これらのユーザーとグループには、プロジェクトが存在するフォルダーにアクセスするために、オペレーティング・システム・レベルでの適切な許可も必要です。InfoSphere DataStage クライアントを使用するためには、これらのクライアントがインストールされた Windows コンピューターの管理ユーザーでもある必要があります。

また、このセクションでは、DataStage オペレーターまたは DataStage スーパー・オペレーターのロールを持つユーザーのジョブ・ログのエントリーのデフォルト・ビューを変更する方法についても説明します。

「許可」ページには、次の制御が含まれます。

- 「**ロール**」。このウィンドウには、現在、このプロジェクトに対するアクセス許可を持っているすべてのユーザーとグループが、そのロールと共にリストされます。このウィンドウには、スイート・アドミニストレーター・ツールの中で DataStage アドミニストレーターとして定義されたユーザーが常に含まれ、そのようなユーザーをリストから削除したり、ユーザー・ロールを変更したりすることはできないことに注意してください。
- 「**ユーザー・ロール**」。このリストには、割り当てることができる 4 つの InfoSphere DataStage ユーザー・カテゴリーが含まれます。リストから 1 つを選択し、それを、現在「ロール」ウィンドウで選択されているユーザーに割り当てます。
- 「**ユーザーまたはグループの追加**」。これをクリックすると、「ロール」ウィンドウにリストされたユーザーまたはグループに新規のユーザーまたはグループを追加するための「ユーザー/グループの追加」ダイアログ・ボックスが開きます。
- 「**削除**」。これをクリックすると、「ロール」ウィンドウにリストされたユーザーまたはグループから、選択されたユーザーまたはグループが削除されます。
- 「**DataStage オペレーターにすべてのログの参照を許可**」。このチェック・ボックスはデフォルトで選択済みになっています。その場合、InfoSphere DataStage オペレーターは、エラー・メッセージと、ジョブ・ログ・ファイルの中のエントリーに関連付けられたデータの両方を見ることができます。オペレーターがログ・ファイル・エントリーのデータ・パーツを見ることができないようにするには、このチェック・ボックスをクリアします。そうすると、データへのアクセスは、開発者ロール以上を持つユーザーに制限されます。

「許可」ページでプロジェクトのユーザー、グループ、およびロールを割り当てた後で、新規プロジェクトを追加するときのテンプレートとしてこのプロジェクトを使用できます。新規プロジェクトを追加するたびに処理を繰り返す必要がないように、新規プロジェクトは、プロジェクトからユーザー、グループ、およびロールを継承できます。

InfoSphere DataStage ユーザー・ロール

InfoSphere DataStage プロジェクトへの無許可アクセスを防止するには、システムの InfoSphere DataStage ユーザーまたはグループに、適切な InfoSphere DataStage ユーザー・ロールを割り当てる必要があります。

ユーザー・ロールの詳細については、『InfoSphere DataStage and QualityStage ユーザー・ロール』を参照してください。

InfoSphere DataStage ユーザー・ロールの割り当て

アドミニストレーター・クライアントで、InfoSphere DataStage ユーザーおよびグループを表示できます。スイート・ユーザー・ロールの割り当ては IBM InfoSphere Information Server Web コンソールで行います。

手順

1. 「許可」ページを開きます。
2. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
3. プロジェクトを選択します。
4. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
5. 「許可」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。デフォルトで、この「許可」タブには、Web コンソールの「管理」タブで、DataStage アドミニストレーターとして定義されたすべてのユーザーまたはグループが表示されます。このようなユーザーは、このプロジェクトについて、DataStage アドミニストレーター・ロールのアクセスを自動的に持ちます。このアクセス権を、「ユーザー・ロール」ドロップダウン・リストおよび「削除」ボタンを使用して削除することはできません。この両方とも使用できません。
6. InfoSphere DataStage ユーザーを追加するには、次のようにします。
 - a. Web コンソールを開きます。
 - b. 「ナビゲーション」ペインで、「ユーザーとグループ」をクリックします。
 - c. 「ユーザー」をクリックします。
 - d. ユーザーを割り当てるには、Web コンソール・ヘルプの指示に従います。
7. 以前にこのプロジェクトに追加した InfoSphere DataStage ユーザーまたはグループを除去するには、次のようにします。
 - a. Web コンソールの「管理」タブで、「ユーザー」表の中からユーザーを選択します。
 - b. 「タスク」ペインで「削除」をクリックします。

オペレーターに対するジョブ・ログ・エントリーの表示の変更

ジョブ・ログ・ファイルのエントリーは、デフォルトでは、エラー・メッセージとエラーに関連するデータで構成されています。オペレーターに対するジョブ・ログ・エントリーの表示を変更することで、関連するデータを非表示にできます。

このタスクについて

デフォルトでは、DataStage オペレーターまたはスーパー・オペレーターがイベントの詳細を表示する際に、IBM InfoSphere DataStage and QualityStage ディレクター・クライアントおよびデザイナー・クライアントではメッセージとデータの両方が表示されます。この設定を変更してエラー・メッセージだけがオペレーターに表示されるようにするには、「許可」ページで「**DataStage オペレーターにすべてのログの参照を許可**」チェック・ボックスの選択を解除して、「OK」をクリックします。これで、関連するデータへのアクセスは、開発者権限を持つユーザーに限定されるようになります。

InfoSphere Information Server エンジンでのトレースの有効化

InfoSphere Information Server エンジンのアクティビティをトレースして、プロジェクトの問題点の診断に利用できます。

このタスクについて

デフォルトでは、トレースは無効になっています。トレースを有効にすると、プロジェクトにアタッチするあらゆるクライアントのエンジン・アクティビティについての情報が記録されます。この情報はトレース・ファイルに書き込まれます。システム・ソフトウェアについて詳細な知識があれば、トレース・ファイルはクライアントでの問題の原因を判断する場合に役立ちます。

トレースが有効である場合、InfoSphere DataStage クライアントを開始すると必ず警告メッセージが表示されます。

トレースは、アドミニストレーター・クライアントからも有効にできるジョブ管理コマンド「リソースのクリーンアップ」とは互換性がありません。詳細は、ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化を参照してください。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
4. 「トレース」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
5. 「サーバー側トレース機能」領域の「有効」オプション・ボタンをクリックします。
6. 「OK」をクリックして、トレースをアクティブにします。クライアントがプロジェクトにアタッチすると必ず「トレース」ページの「トレース・ファイル」リスト・ボックスにトレース・ファイルが追加されます。
7. トレース・ファイルを表示するには、「トレース・ファイル」リスト・ボックスでファイル名をダブルクリックするか、ファイル名を選択して「ビュー」ボタンをクリックします。「トレース・ファイルの表示」ウィンドウに、トレース

ス・ファイルが表示されます。トレース情報をクリップボードにコピーするには、「トレース・ファイルの表示」ウィンドウでテキストを選択して、「コピー」をクリックします。

8. トレース・ファイルを削除するには、「トレース・ファイル」リスト・ボックスで 1 つ以上のファイル名を選択してから、「削除」ボタンをクリックします。

スケジューリング・ユーザーの指定

エンジンの実行場所が Windows コンピューターの場合、InfoSphere DataStage は、Windows スケジュール・サービスを使用してジョブをスケジュールします。

このタスクについて

このため、デフォルトでは、ジョブはスケジュール・サービスのユーザー名で実行されます。スケジュール・サービスのユーザーは、デフォルトでは、NT システム権限者に設定されています。場合によっては、NT システム権限に、ジョブを実行するために必要な十分な権限がないことがあります。この問題を解決するため、次の手順に従って、プロジェクトのスケジュール済みジョブを実行するユーザー名を定義できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
4. 「スケジュール」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
5. 使用したいユーザー名とパスワードを入力して、スケジュール済みジョブを実行します。
6. 「テスト」をクリックして、ユーザー名とパスワードが正常に使用できるかをテストします。これには、InfoSphere Information Server エンジン上でのコマンドのスケジューリングと実行も含まれるため、テスト完了まで、しばらく時間がかかることがあります。
7. 「OK」をクリックして、ユーザー名とパスワードを保存します。

メインフレーム情報の提供

メインフレーム・ジョブがデザイナーからメインフレーム・コンピューターへアップロードされるときに、JCL スクリプトもアップロードされます。メインフレーム・ジョブ・プロパティを定義し、スクリプトに含めるデフォルト・プラットフォーム・タイプを指定する必要があります。

このタスクについて

スクリプトは、メインフレーム・ジョブがコンパイルされるときに必要な情報を提供します。メインフレーム・ジョブをサポートするプロジェクトについては、このスクリプトに含めるメインフレーム・ジョブ・プロパティを定義する必要があります。また、デフォルトのプラットフォーム・タイプを設定する必要があります。

このプラットフォーム・タイプは、メインフレーム・ルーチンのような新しいオブジェクトがデザイナーで作成されるときにデフォルトです。このページでは、プラットフォーム・ファイルでの NULL の定義方法の詳細も指定できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. メインフレーム・ジョブをサポートするプロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
4. 「メインフレーム」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。

「メインフレーム」タブは、選択したプロジェクトがメインフレーム・ジョブをサポートする場合のみ表示されます。

5. 「日付形式」ドロップダウン・リストから、プロジェクトのデフォルトの日付形式を選択します。(プロジェクトのデフォルトは、デザイナー・クライアントの「ジョブ・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、ジョブ・レベルでオーバーライドできます。)
6. 「プラットフォーム・タイプ」リストから、プラットフォームのタイプを選択します。
7. データベース・システム名、ユーザー名、およびパスワードを入力します。
8. 選択したプラットフォームに対するデフォルトの最大ブロック・サイズと最大ブロック係数を変更する場合は、「最大ブロック係数」フィールドと「最大ブロック・サイズ」フィールドに新しい値を入力します。

(OS/390[®] プラットフォームでは、最大ブロック係数として 1 から 32767 までの値を設定できます。最大ブロック・サイズには、0、または 4096 から 32767 までの値を設定できます。0 を指定すると、オペレーティング・システムが最適なブロック・サイズを設定します。)

9. 選択されたプラットフォームをデフォルトと設定するには、「デフォルトに設定」ボタンをクリックします。プラットフォーム・タイプの後ろの括弧の中に「デフォルト」が表示されます。
10. 「式のセマンティック・チェックを実行」を選択すると、デフォルトで、プロジェクトのすべてのメインフレーム・ジョブの式エディターでセマンティック・チェックが実行されます。この設定は、必要に応じて、ジョブ・レベルで変更できます。
11. 「拡張 10 進数をサポート」を選択して、ジョブ内のプロジェクトでの拡張 10 進数の使用を有効にします。「最大 10 進数サイズ」フィールドが有効になります。
12. 「オペレーショナル・メタデータを生成」を選択すると、デフォルトで、プロジェクトのメインフレーム・ジョブのオペレーショナル・メタデータが生成されます。この設定は、必要に応じて、ジョブ・レベルで変更できます。

13. 「**拡張 10 進数をサポート**」を選択した場合、プロジェクトのメインフレーム・ジョブで使用するメタデータの「**長さ**」フィールドに指定できる最大値を「**最大 10 進数サイズ**」フィールドに入力してください。設定できる値は 18 (デフォルト) または 31 です。
14. 「**NULL インジケータの位置**」ドロップダウン・リストから、「**列の前**」または「**列の後**」を選択して、メインフレーム列定義における NULL インジケータの位置を指定します。
15. 「**NULL インジケータ値**」フィールドに、メインフレーム列定義の NULL 可能性を示すための文字を指定します。NULL インジケータは、1 バイトの印刷可能文字でなければなりません。次のいずれかを指定します。
 - 1 文字の値 (1 がデフォルトです)
 - 3 桁の 10 進数で表した ASCII コード。範囲は 000 から 255 までです。
 - %Hnn または %hnn の 16 進形式の ASCII コード。nn は、16 進数字 (0 から 9、a から f、A から F) です。
16. 「**非 NULL インジケータ値**」フィールドに、メインフレーム・フラット・ファイルでの非 NULL 列定義を示すための文字を指定します。NULL インジケータは、1 バイトの印刷可能文字でなければなりません。次のいずれかを指定します。
 - 1 文字の値 (0 がデフォルトです)
 - 3 桁の 10 進数で表した ASCII コード。範囲は 000 から 255 までです。
 - %Hnn または %hnn の 16 進形式の ASCII コード。nn は、16 進数字 (0 から 9、a から f、A から F) です。
17. 「**OK**」をクリックして、変更を保存します。

「チューニング」ページ

「チューニング」ページでは、Hashed File ステージでのキャッシュの詳細設定と、サーバー・ジョブのパフォーマンスを向上させるための行バッファの設定を行います。

Hashed File キャッシング

Hashed File ステージがレコードをハッシュ・ファイルに書き込むとき、すぐにハッシュ・ファイルに書き込まずに、書き込みをキャッシュするオプションがあります。

このタスクについて

同様に、Hashed File ステージがハッシュ・ファイルを読み取るときに、ハッシュ・ファイルをメモリーにプリロードするオプションがあります。このオプションを使用すると、以降のアクセスを非常に高速にし、ファイルが Transformer ステージに対する参照リンクを提供するときに使用されます。(UniData ステージにも、ファイルをメモリーにプリロードするオプションがあります。この場合、同じキャッシュ・サイズが使用されます。)

「チューニング」ページの「**Hashed File ステージ**」領域で、読み取りキャッシュ・サイズと書き込みキャッシュ・サイズを設定します。

手順

1. 読み取りキャッシュ・サイズを指定するには、「読み取りキャッシュ・サイズ (MB)」フィールドに、0 から 999 の値を入力します。値はメガバイト単位で指定し、デフォルトは 128 です。
2. 書き込みキャッシュ・サイズを指定するには、「書き込みキャッシュ・サイズ (MB)」フィールドに、0 から 999 の値を入力します。値はメガバイト単位で指定し、デフォルトは 128 です。
3. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

行バッファリング

行バッファリングを使用すると、サーバー・ジョブのパフォーマンスを大きく向上させることができます。

この機能をプロジェクト全体に対して有効にするには、「行バッファを有効にする」チェック・ボックスを選択します。

次の 2 種類の相互排他的な行バッファリングがあります。

- **プロセス内**。プロセス内行バッファリングをオンにし、ジョブをリコンパイルすると、ほとんどのジョブのパフォーマンスを改善できます。これによって、接続されているアクティブ・ステージは、行単位ではなく、バッファ経由でデータを渡せます。
- **プロセス間**。SMP パラレル・システム上でサーバー・ジョブを実行する場合に使用します。これによって、ジョブは、アクティブ・ステージごとに別々のプロセスを使用して実行されます。各アクティブ・ステージは別々のプロセッサで同時に実行されます。

ステージ間のデータのやり取りに変換処理関数の **COMMON** ブロックを使用するようにジョブを作成すると、どちらの行バッファリングも使用できません。この方法はお勧めしません。COMMON ブロックではなく行バッファリングを使用するようにジョブを再設計することをお勧めします。

行バッファリングを有効にすると、次の項目を指定できます。

- **バッファ・サイズ**。プロセス内またはプロセス間行バッファリングで使用するバッファのサイズを指定します。デフォルトは 128 KB です。
- **タイムアウト**。プロセス間の行バッファリングを使用するときのみ適用されます。1 プロセスがバッファ経由で他プロセスと通信する場合のタイムアウトとなるまでの待ち時間を指定します。デフォルトは 10 秒です。

「パラレル」ページ

「パラレル」ページを使用すると、プロジェクト内のパラレル・ジョブに特定のデフォルトを指定できます。

「すべてのプロジェクトでパラレル・ジョブの生成 OSH を可視にする」オプションを選択すると、デザイナーとディレクターの次に示すさまざまなポイントで、パラレル・ジョブが生成するコードを参照できます。

- パラレル・ジョブの「ジョブ・プロパティ」ダイアログ・ボックス

- ジョブ実行ログ・メッセージ
- デザイナーでデータ参照機能を使用したとき
- 「表定義」ダイアログ・ボックス

このオプションを選択すると、現在選択されているプロジェクトだけではなく、すべてのプロジェクトで、この機能が有効になることに注意してください。

Orchestrate® を使い慣れたユーザーであれば、「**パラレル・ジョブのための詳細なランタイム・オプション**」フィールドに、OSH コマンド・ラインに追加するパラメータを入力することもできます。通常は、ブランクのままにしておきます。このフィールドを使用して、`-nosortinsertion` オプションまたは `-nopartinsertion` オプションを指定できます。これらのオプションを指定すると、InfoSphere DataStage が必要と判断した場所にソート処理またはパーティション化処理を自動挿入することがなくなります。これは、プロジェクト内のすべてのジョブに適用されます。

「**パラレル・ジョブのメッセージ・ハンドラー**」では、プロジェクトのすべてのパラレル・ジョブで使用するメッセージ・ハンドラーを指定できます。メッセージ・ハンドラーの定義は、ディレクターで行います。メッセージ・ハンドラーは、パラレル・ジョブで生成される警告メッセージまたは情報メッセージの処理方法を指定します。ドロップダウン・リストから、定義済みのハンドラーを 1 つ選択します。

「**フォーマット・デフォルト**」領域を指定すると、日付、時刻、タイム・スタンプ、小数点のシステム・デフォルト・フォーマットをオーバーライドできます。デフォルトを変更するには、対応する「**システム・デフォルト**」チェック・ボックスを選択解除して、ドロップダウン・リストから新しいフォーマットを選択するか、新しいフォーマットを入力します。

「シーケンス」 ページ

「シーケンス」 ページを使用して、ジョブ・シーケンスのコンパイルのデフォルトを設定します。オプションで、InfoSphere DataStage がジョブ・シーケンスにチェックポイントを追加するように設定できます。チェックポイントを追加しておけば、シーケンスの一部が失敗した場合に最初から再実行する必要がなくなります。

問題を修正して、失敗したポイントからシーケンスを再実行できます。また、シーケンスの実行中に失敗したジョブを、InfoSphere DataStage が自動処理するように指定できます (つまり、失敗したジョブ用のトリガーが不要になります)。

「シーケンス」 ページで残りのオプションを選択すると、実行したジョブが警告または致命的エラーで終了したり、実行したコマンドまたはルーチンがエラー状態で終了したりした場合に、ジョブ・シーケンスがデフォルトでシーケンス・ログにメッセージを記録するように指定できます。また、ジョブの実行終了後すぐにジョブの状況報告書がログに記録されるように設定できます。

リモート・システムにデプロイ

パラレル・ジョブのリモート・デプロイメントを指定できます。

このタスクについて

パラレル・ジョブをそのほかのデプロイメント専用システムにデプロイする場合は、このページで次を指定できます。

- リモート・デプロイメントの場所を指定する。
- デプロイメント・ディレクトリーの名前を指定する。
- デプロイメント・コンパイル終了後に実行されるアクションを指定する。

手順

1. 「ベース・ディレクトリー名」フィールドに、デプロイメント用ホーム・ディレクトリーの場所を指定します。ホーム・ディレクトリーには、ジョブごとに1つのディレクトリーが存在します。InfoSphere Information Server エンジン・マシンからアクセスできる場所を指定する必要がありますが、そのマシンに対してローカルなディスクである必要はありません。場所を指定することによってジョブ・デプロイメント機能が有効になります。

2. 「デプロイされるジョブ・ディレクトリー・テンプレート」フィールドには、必要に応じて、特定のジョブに関連付けられたデプロイメント・ディレクトリーの別名を指定します。このフィールドは、「ベース・ディレクトリー名」フィールドと一緒に指定します。名前が指定されていない場合、デフォルトでは、名前は、InfoSphere Information Server エンジン・プロジェクト・ディレクトリーで使用される内部スクリプト・ディレクトリー `RT_SCjobnum` に対応します。ここで、`jobnum` は、そのジョブに割り振られた内部ジョブ番号です。次の置換ストリングを指定できます。

- %j - ジョブ名
- %d - 内部番号

最も簡単な形式は「%j」で、ジョブ名を使用します。接頭部を使用し、「job_%j」のように指定できます。デフォルトは、`RT_SC%d` に対応しています。

3. 「カスタム・デプロイメント・コマンド」フィールドでは、必要に応じて、デプロイメント・コンパイルの終了後に実行されるアクションを指定します。必要であれば、UNIX プログラムまたはユーザーのシェル・スクリプト呼び出し、あるいはその両方を指定できます。

このフィールドでは、ディレクトリー・テンプレートと同じ置換ストリングを使用します。例を示します。

```
tar -cvf ../%j.tar * ; compress ../%j.tar
```

この例では、デプロイされたジョブの圧縮 `*.tar` アーカイブ・ファイルがジョブと同じ名前で作成されます。

「ログ」 ページ

「ログ」 ページを使用して、プロジェクトの中のジョブの実行時に、そのジョブの情報がどのようにログに記録されるかを制御します。

ジョブ・ログ・ファイルのパージ

すべての InfoSphere DataStage ジョブにログ・ファイルがあり、ジョブを実行するたびに新しいエントリーがログ・ファイルに追加されます。このファイルが大きくなり過ぎないようにするため、時々ログをパージする必要があります。

このタスクについて

このファイルが大きくなり過ぎないようにするため、時々ログをパージする必要があります。プロジェクト全体に対するデフォルト値を設定してジョブ・ログを自動的にパージしたり、手動でログをパージしたりできます。アドミニストレーター・クライアントのデフォルトを変更すると、新しい設定がプロジェクトのジョブに反映されます。ただし、ジョブがデフォルト設定をオーバーライドしている場合は別です (この設定はディレクター・クライアントから実行します)。この場合、オーバーライドした値のままです。

プロジェクトの自動パージを設定するには、次のようにします。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが現れ、「全般」ページが表示されます。
4. 「ログ」タブをクリックします。
5. 「ログ」ページで「ジョブ・ログの自動パージ」チェック・ボックスを選択します。
6. 自動パージ・アクションを選択します。指定の日数を経過したジョブをパージしたり、ログに残すジョブの数を指定したりできます。例えば、10 回分のジョブ実行を指定すると、最新の 10 回分のジョブ実行のエントリーが保持されます。
7. 「OK」をクリックして、自動パージ・ポリシーを設定します。自動パージはこのプロジェクト内で作成されるすべての新規ジョブに適用されます。「ログのパージ」ウィンドウで既存のジョブに対する自動パージを設定することもできます。ディレクターからこのウィンドウにアクセスするには、「ジョブ」 > 「ログの消去...」を選択します。

タスクの結果

「ディレクター」ウィンドウで、「ジョブ」 > 「ログのパージ...」を選択すると、ジョブごとにジョブ・ログの自動パージを設定できます。

ディレクター・クライアントの「ジョブ状況」ビューからジョブ・ログ・ファイルとジョブ・インスタンスを削除できます。

第 5 章 プロジェクトの NLS の構成

IBM InfoSphere DataStage には、各国語サポート (NLS) が組み込まれています。

すなわち、InfoSphere DataStage は次の処理ができます。

- 多様な言語でのデータ処理
- 日付、時刻、通貨に対するローカル・フォーマットの使用
- ローカル・ルールに基づいたデータのソート

NLS を使用して、InfoSphere DataStage は、データを Unicode フォーマットで保持します。これは、世界中の言語で使用されている数多くの文字を含んだ国際標準文字セットです。InfoSphere DataStage は必要に応じて、Unicode フォーマットから、または Unicode フォーマットにデータをマッピングします。

各 InfoSphere DataStage プロジェクトには、インストール時に割り当てられたマップおよびロケールがあります。マップはプロジェクトが使用できる文字セットを定義します。ロケールは、プロジェクトがその地域で使用する日付、時刻、ソート順序など (ソート順序はパラレル・ジョブの場合のみ) のフォーマットを定義します。また、データが正しいフォーマットで転送されるように InfoSphere DataStage クライアントおよびサーバー・コンポーネントにもインストール時にマップが割り当てられています。

InfoSphere DataStage では、別々のメカニズムでサーバー・ジョブとパラレル・ジョブに NLS を設定するので、マップとロケールの詳細をジョブの 2 つのタイプとして別々に設定してください。通常の状態では、2 つの設定は一致します。

「アドミニストレーター」ウィンドウから、インストール時に割り当てられたマップやロケールをチェックし、必要に応じて変更できます。

プロジェクト・マップの変更

プロジェクト・マップを表示または変更することができます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「NLS...」をクリックします。「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウが表示されます。

「NLS...」ボタンがアクティブでない場合、NLS がインストールされていません。

4. サーバー・ジョブまたはパラレル・ジョブのプロジェクト・マップを設定するかどうかを選択し、これに応じて「サーバー・マップ」または「パラレル・マップ」タブを選択します。

サーバー・ジョブのプロジェクト・マップ

「デフォルト・マップ名」フィールドに、プロジェクトのサーバー・ジョブで使用する現在のマップが表示されます。

このタスクについて

デフォルトでは、InfoSphere DataStage にロードされ、使用可能なマップのみがリストに表示されます。「すべてのマップを表示」をクリックすると、InfoSphere DataStage に付属しているすべてのマップ・リストを確認できます。

プロジェクトのデフォルト・マップ名を変更するには、使用するマップ名をクリックして、「OK」をクリックします。

マップを InfoSphere DataStage にインストールするには、「インストール」をクリックします。「マップ」ページに追加のオプションが表示されます。

「利用可能」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべての文字セット・マップが表示されます。「インストール済み/ロード済み」リストには、現在インストールされているマップが表示されます。マップをインストールするには、「利用可能」リストからマップを選択し、「追加」をクリックします。このマップは、次のサーバーの再起動時に InfoSphere DataStage にロードされ、使用できるようになります。すぐにマップを使用する必要がある場合は、サーバー・エンジンを再起動してください。

インストールされているマップを削除するには、マップを「インストール済み/ロード済み」リストから選択して、「削除」をクリックします。このマップは次のサーバーのリブート時またはサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

パラレル・ジョブのプロジェクト・マップ

「デフォルト・マップ名」フィールドに、プロジェクトのパラレル・ジョブで使用する現在のマップが表示されます。

このタスクについて

リストには、InfoSphere DataStage にロードされ、使用可能なマップのみが表示されます。デフォルト・マップにするマップをダブルクリックします。

プロジェクト・ロケールの変更

デフォルトのプロジェクトのロケールを表示または変更するには、「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウを開いて、状況に応じて、「サーバー・ロケール」タブまたは「パラレル・ロケール」タブを選択します。

サーバー・ジョブのロケール

IBM InfoSphere DataStage アドミニストレーター・クライアントを使用して、プロジェクトのすべてのサーバー・ジョブのデフォルト・ロケールを表示および変更できます。「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウの「サーバー・ロケール」タブで、インストールされたロケールのドロップダウン・リストからロケールを選択します。

このタスクについて

このページには、次の 5 つのカテゴリに分けられた、デフォルトのプロジェクト・ロケールを示すフィールドがあります。

- 「**時間/日付**」 - 日付と時間のフォーマットです。例えば、31 Dec 1999 と 12/31/99 は、別のロケールで使用される可能性のある同一日付を表す 2 つの方法です。
- 「**数値**」 - 数値に使用するフォーマットで、3 桁の区切り記号および小数点 (小数) を含みます。
- 「**通貨**」 - 通貨ストリングのフォーマットで、通貨記号 (\$、£、€、¥ など) の種類と位置を含みます。
- 「**文字タイプ**」 - 文字タイプのフォーマットです。これには各言語での大文字小文字で表記できる文字の定義も含まれます。
- 「**照合**」 - 各言語でのソート順序です。

デフォルトでは、ロード済みで使用可能なロケールのドロップダウン・リストが各フィールドに用意されています。各カテゴリのロケールを変更するには、ドロップダウン・リストから目的のロケールを選択します。変更が終わったら、「**OK**」をクリックします。「**すべてのロケールの表示**」をクリックしてカテゴリのドロップダウン・リストをクリックすると、InfoSphere DataStage に付属しているすべてのロケール・リストを確認できます。これらのロケールは、InfoSphere DataStage にインストールしてロードしておかなければ使用できません。

ロケールのインストールとロード

ロケールをインストールするには、「**インストール**」をクリックして、「ロケール」ページの詳細オプションを表示します。

このタスクについて

「**利用可能**」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべてのロケールが表示されます。「**インストール済み/ロード済み**」リストには、現在インストールされているロケールが表示されます。ロケールをインストールするには、「**利用可能**」リストからロケールを選択し、「**追加**」をクリックします。このロケールは、次のサーバー・エンジンの再起動時に InfoSphere DataStage にロードされ、使用できるようになります。ロケールを直ちに使用する場合は、サーバー・エンジンを再起動します。

インストールされているロケールを削除するには、「**インストール済み/ロード済み**」リストから目的のロケールを選択して、「**削除**」をクリックします。このロケールは次のサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

パラレル・ジョブ・ロケール

パラレル・ジョブでは照合カテゴリのみを使用します。インストールされたロケールのドロップダウン・リストからロケールを選択します。

このタスクについて

「**参照**」ボタンを使用すると、他の照合シーケンスを定義するテキスト・ファイルを参照して指定できます。

クライアントおよびサーバーのマップ

InfoSphere Information Server エンジンのインストール時に、InfoSphere DataStage でサポートする言語を指定します。InfoSphere DataStage は、サーバーに指定された言語に合わせて、InfoSphere DataStage クライアントがサポートする言語を自動的に設定します。

このタスクについて

別のクライアントから InfoSphere Information Server エンジンにアクセスすると、クライアントとエンジン間でデータが正しくマッピングされない場合があります。データが確実に正しくマッピングされるようにするため、クライアント・マップの変更が必要になることがあります。次のステップを実行すると、現在のマッピングを表示できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「全般」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. 「NLS...」をクリックします。「通常 NLS の設定」ウィンドウが開きます。

タスクの結果

「**現行 ANSI コード・ページ**」フィールドは情報を参照するためのもので、これには、クライアントの現在の Microsoft コード・ページが含まれています。コード・ページは現在のプロジェクトやエンジンには依存しません。「**使用中のクライアント/サーバー・マップ**」フィールドは、エンジン・コンピューター上の現在のクライアント・セッションで使用されているマップ名を表示します。リストは、ロードされているすべてのマップを表示します。

マップを選択して、「**適用**」をクリックすると、InfoSphere DataStage は、表示されているコード・ページを使用して現行サーバーへ接続しているすべてのクライアントに対して、指定のマップの設定を試行します。マッピングがテストされ、不適切な場合は拒否される可能性があります。

InfoSphere DataStage へ新たなマップをインストールするには、「**インストール**」をクリックして「クライアント」ページに詳細オプションを表示します。

InfoSphere DataStage はクライアント/サーバー通信について、名前の終わりに「-CS」(クライアント/サーバー用) が付く特殊なマップを使用しています。クライアント/サーバー通信には常にこれらのマップのいずれかを選択してください。

「**利用可能**」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべての文字セット・マップが表示されます。「**インストール済み/ロード済み**」リストには、現在インストールされているマップが表示されます。マップをインストールするには、「**利用可能**」リストからマップを選択し、「**追加**」をクリックします。このマップは、次のサーバーの再起動時に InfoSphere DataStage へロードされ、使用できるようになります。マップを直ちに使用する場合は、サーバー・エンジンを再始動します。

インストールされているマップを削除するには、マップを「**インストール済み/ロード済み**」リストから選択して、「**削除**」をクリックします。このマップは次のサーバーのリポート時またはサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

付録 A. 製品のアクセシビリティ

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況についての情報を入手できます。

IBM InfoSphere Information Server 製品のモジュールおよびユーザー・インターフェースは完全にはアクセシビリティ対応がなされていません。

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況の詳細は、http://www.ibm.com/able/product_accessibility/index.html の IBM 製品のアクセシビリティ情報をご覧ください。

アクセシビリティ対応資料

IBM Knowledge Center には、製品のアクセシビリティ対応資料が用意されています。IBM Knowledge Center では、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で資料を提供しています。IBM Knowledge Center では XHTML を使用しているため、使用しているブラウザに設定されている表示形式で資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーやその他の支援技術を使用して、資料にアクセスすることもできます。

IBM Knowledge Center にある資料は、PDF ファイルでも提供されますが、こちらは完全にはアクセシビリティ対応がなされていません。

IBM のアクセシビリティに対する取り組み

アクセシビリティに関する IBM のコミットメントの詳細については、IBM Human Ability and Accessibility Center を参照してください。

付録 B. IBM の窓口

お客様サポート、ソフトウェア・サービス、製品情報、および全般情報について、IBM と連絡を取ることができます。また、製品についてのフィードバックを行うことができます。

次の表に、お客様サポート、ソフトウェア・サービス、研修、製品およびソリューション情報に関するリソースをリストしています。

表1. IBM リソース

リソース	説明と場所
IBM サポート・ポータル	サポート情報は、 www.ibm.com/support/entry/portal/Software/Information_Management/InfoSphere_Information_Server で、製品と関心のあるトピックを選択してカスタマイズできます。
ソフトウェア・サービス	ソフトウェア、IT、およびビジネス・コンサルティング・サービスについての情報は、「ソリューション」サイト www.ibm.com/businesssolutions/jp/ja にアクセスしてください。
My IBM	www.ibm.com/account/jp/ja/ の「My IBM」サイトでアカウントを作成し、特定のテクニカル・サポートのニーズに合うように、IBM Web サイトおよび情報へのリンクを管理できます。
研修と認定	個人、法人、および公共団体向けに、IT 技術の習得、維持、最適化を目的としてデザインされた技術研修およびサービスについては、 http://www.ibm.com/training にアクセスしてください。
IBM 担当員	ソリューションについて IBM 担当員と連絡を取るには、 www.ibm.com/connect/ibm/us/en/ にアクセスしてください。

付録 C. 製品資料へのアクセス

資料は、オンラインの IBM Knowledge Center、オプションでローカルにインストールしたインフォメーション・センター、PDF のブックといったさまざまな形式で提供されます。製品クライアント・インターフェースから、オンラインまたはローカルにインストールしたヘルプに直接アクセスすることができます。

IBM Knowledge Center は、InfoSphere Information Server の最新情報を探すのに最適な場所です。IBM Knowledge Center には、スイートのすべての製品モジュールの全資料のほか、ほとんどの製品インターフェースのヘルプも含まれています。IBM Knowledge Center は、インストール済み製品から開くことも、Web ブラウザーから開くこともできます。

IBM Knowledge Center へのアクセス

オンライン資料にアクセスするには、さまざまな方法があります。

- クライアント・インターフェースで、画面右上の「ヘルプ」リンクをクリックします。
- F1 キーを押します。F1 キーを押すと、通常、クライアント・インターフェースの現行コンテキストを説明するトピックが開きます。

注: F1 キーは、Web クライアントでは機能しません。

- 製品にログインしていないときなどに、Web ブラウザーにアドレスを入力します。

すべてのバージョンの InfoSphere Information Server の資料にアクセスするには、以下のアドレスを入力します。

<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZJPZ/>

特定のトピックにアクセスするには、製品 ID とバージョン番号、資料プラグイン名、および URL 内のトピック・パスを指定します。例えば、バージョン 11.3 用のこのトピックの URL は以下のとおりです。(記号「⇒」は、行の継続を表します)

http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSZJPZ_11.3.0/⇒com.ibm.swg.im.iis.common.doc/common/accessingiidoc.html

ヒント:

Knowledge Center には、以下の短縮 URL もあります。

<http://ibm.biz/knowctr>

特定の製品ページ、バージョン、またはトピックの短縮 URL を指定するには、短縮 URL と製品 ID の間にハッシュ文字 (#) を使用します。例えば、すべての InfoSphere Information Server 資料の短縮 URL は、以下のとおりです。

<http://ibm.biz/knowctr#SSZJPZ/>

また、前述のトピックの URL を少し短くした短縮 URL は、以下のとおりです。(記号「⇒」は、行の継続を表します)

```
http://ibm.biz/knowctr#SSZJPZ_11.3.0/com.ibm.swg.im.iis.common.doc/⇒  
common/accessingiidoc.html
```

ローカルにインストールした資料を参照するヘルプ・リンクの変更

IBM Knowledge Center には、最新版の資料が含まれています。一方、インフォメーション・センターとしてローカル版の資料をインストールして、それを指すようにヘルプ・リンクを構成することも可能です。ローカルのインフォメーション・センターは、お客様の企業でインターネットへのアクセスが提供されていない場合に便利です。

インフォメーション・センターのインストール・パッケージに付属するインストール手順を使用して、任意のコンピューターにそれをインストールします。インフォメーション・センターをインストールして開始した後、サービス層のコンピューターで **iisAdmin** コマンドを使用して、製品の F1 とヘルプ・リンクで参照する資料の場所を変更できます。(記号「⇒」は、行の継続を表します)

Windows

```
IS_install_path¥ASBServer¥bin¥iisAdmin.bat -set -key ⇒  
com.ibm.iis.infocenter.url -value http://<host>:<port>/help/topic/
```

AIX® Linux

```
IS_install_path/ASBServer/bin/iisAdmin.sh -set -key ⇒  
com.ibm.iis.infocenter.url -value http://<host>:<port>/help/topic/
```

ここで、<host> はインフォメーション・センターがインストールされたコンピューターの名前、<port> はインフォメーション・センターのポート番号です。デフォルトのポート番号は 8888 です。例えば、デフォルト・ポートを使用するコンピューター `server1.example.com` 上の URL 値は、`http://server1.example.com:8888/help/topic/` になります。

PDF およびハードコピー資料の入手

- PDF ファイルのブックはオンラインで利用可能で、サポートの文書 <https://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27008803&wv=1> からアクセスできます。
- IBM 資料は、オンラインでダウンロード、または IBM 担当員を通じてご注文いただけます。資料をオンラインでダウンロードするには <http://www.ibm.com/e-business/linkweb/publications/servlet/pbi.wss> の IBM Publications Center にアクセスしてください。

付録 D. 製品資料に関するフィードバックの提供

IBM の資料に関する貴重なフィードバックをご提供ください。

お客様からのご意見やご感想は、IBM が質の高い情報を提供するための参考にさせていただきます。ご意見をお寄せいただく場合は、次のいずれかの方法を使用することができます。

- IBM の Web サイトでホストしている IBM Knowledge Center 内のトピックについてコメントをお寄せいただくには、サインインし、トピックの下の「**コメントの追加**」ボタンをクリックしてコメントを追加してください。このようにして送信されたコメントは、一般に公開されます。
- IBM Knowledge Center 内のトピックに関するコメントを IBM に送信し、他の人からは閲覧できないようにするには、サインインし、IBM Knowledge Center の下の「**フィードバック**」リンクをクリックしてください。
- オンライン・リーダー用のコメント・フォーム (www.ibm.com/software/awdtools/rcf/) を使用して、コメントを送信します。
- コメントを E メールで comments@us.ibm.com に送付します。お送りいただく情報には、製品の名前、製品のバージョン番号、資料の名前と部品番号 (該当する場合) を含めてください。特定のテキストについてご意見がある場合は、そのテキストの位置 (例えば、タイトル、表番号、ページ番号など) を記載してください。

特記事項および商標

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料は、IBM から他の言語でも提供されている可能性があります。ただし、ご利用にはその言語版の製品もしくは製品のコピーを所有していることが必要な場合があります。

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、さまざまなオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されて

います。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッションごとの Cookie または永続的な Cookie を使用する場合があります。製品またはコンポーネントがリストされていない場合、その製品またはコンポーネントは Cookie を使用しません。

表 2. InfoSphere Information Server 製品およびコンポーネントによる Cookie の使用

製品モジュール	コンポーネントまたは機能	使用される Cookie の種類	収集するデータ	データの目的	Cookie の無効化
すべて (InfoSphere Information Server インストール済み環境の部分)	InfoSphere Information Server Web コンソール	<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	ユーザー名	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 	無効にできない

表2. InfoSphere Information Server 製品およびコンポーネントによる Cookie の使用 (続き)

製品モジュール	コンポーネントまたは機能	使用される Cookie の種類	収集するデータ	データの目的	Cookie の無効化
すべて (InfoSphere Information Server インストール済み環境の部分)	InfoSphere Metadata Asset Manager	<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	個人情報でない	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 拡張されたユーザーのユーザビリティ シングル・サインオン構成 	無効にできない
InfoSphere DataStage	Big Data File ステージ	<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	<ul style="list-style-type: none"> ユーザー名 デジタル署名 セッション ID 	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 シングル・サインオン構成 	無効にできない
InfoSphere DataStage	XML ステージ	セッション	内部 ID	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 	無効にできない
InfoSphere DataStage	IBM InfoSphere DataStage and QualityStage Operations Console	セッション	個人情報でない	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 	無効にできない
InfoSphere Data Click	InfoSphere Information Server Web コンソール	<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	ユーザー名	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 	無効にできない
InfoSphere Data Quality Console		セッション	個人情報でない	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 シングル・サインオン構成 	無効にできない
InfoSphere QualityStage Standardization Rules Designer	InfoSphere Information Server Web コンソール	<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	ユーザー名	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 	無効にできない
InfoSphere Information Governance Catalog		<ul style="list-style-type: none"> セッション 永続 	<ul style="list-style-type: none"> ユーザー名 内部 ID ツリーの状態 	<ul style="list-style-type: none"> セッション管理 認証 シングル・サインオン構成 	無効にできない
InfoSphere Information Analyzer	InfoSphere DataStage and QualityStage Designer クライアントの中の Data Rules ステージ	セッション	セッション ID	セッション管理	無効にできない

この「ソフトウェア・オフリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライ

ン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 (<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』 (<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Intel、Itanium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows および Windows NT は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java[™] およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アドミニストレーター 3
「アドミニストレーター」ウィンドウ 27
アドミニストレーター・クライアント 1
インストール
マップ 32
ロケール 31
ウィンドウ
コマンド出力 5
通常 NLS の設定 32
トレース・ファイルの表示 20
プロジェクト NLS 設定 29
プロジェクト・プロパティ 11
DataStage アドミニストレーター 3, 29
お客様サポート
連絡先 35
オペレーショナル・メタデータ 16

[カ行]

各国語サポート、NLS を参照 29
環境変数
ファイルからのインポート 16
ファイルへのエクスポート 15
「許可」ページ 19
クライアントおよびサーバーのマップ 32
コード・ページ 32
コマンド
InfoSphere Information Server エンジン 5
「コマンド出力」ウィンドウ 5
「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックス 5

[サ行]

サーバーのタイムアウト、設定 4
サーバーのトレース 20
サーバー・アクティビティのトレース 20
サポート
お客様 35
時間 31

自動ページ・デフォルト 27
「状況ファイルの消去」オプション 12
小数点 31
商標
リスト 41
ジョブ
状況ファイルの消去 12
スケジューリング 21
ファイルのクリーンアップ 12
ログ・ファイル 27
ジョブ管理 12
ジョブのスケジューリング 21
ジョブ・プロパティ、メインフレーム 21
スイート・アドミニストレーター 1
数値 31
スケジュール済みジョブのユーザー名のテスト 21
製品資料
アクセス 37
製品のアクセシビリティ
アクセシビリティ 33
設定
サーバーのタイムアウト 4
自動ページ・デフォルト 27
スケジュール済みジョブのユーザー名 21
メインフレーム・ジョブ・プロパティ 21
ソート順序 31
ソフトウェア・サービス
連絡先 35

[タ行]

ダイアログ・ボックス
コマンド・インターフェース 5
プロジェクトの追加 8
DataStage リポジトリ・インポート 9
追加
プロジェクト 7
通貨記号 31
「通常 NLS の設定」ウィンドウ 32
デプロイメント・システム 26
特記事項 41
「トレース・ファイルの表示」ウィンドウ 20

[ハ行]

ページ、自動 27
日付 31
表示
マップ 29
ロケール 30
ファイル
クリーンアップ 12
トレース 20
ログ 27
プロジェクト 27
移動 8
削除 8
追加 7
「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウ 29
プロジェクトの移動 8
プロジェクトの削除 8
「プロジェクトの追加」ダイアログ・ボックス 8
「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウ 11
「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウの「スケジュール」ページ 21
プロジェクト・プロパティの編集 11
プロパティ
プロジェクト 11
メインフレーム 21
変更
マップ 29
ロケール 30

[マ行]

マップ 29
インストール 32
クライアント およびサーバー 32
変更 29
メインフレーム・ジョブ・プロパティ、設定 21
メッセージ・ハンドラー 25
文字タイプ 31

[ヤ行]

ユーザー・ロール 19
有効化
サーバーのトレース 20
ディレクターでのジョブ管理 12

[ラ行]

- 「リソースのクリーンアップ」オプション 12
- リモート・デプロイメント 26
- 「ログ」ページ 27
- ログ・ファイル
 - オペレーターに対する表示の設定 20
 - 自動パーシ 27
 - 手動パーシ 27
- ロケール 30
 - インストール 31
 - 変更 30

- NLS (各国語サポート) (続き)
 - ロケール 30
- NT システム権限 21

U

- Unicode 29

W

- Web コンソール
 - 「アドミニストレーター」タブ 3
- Windows スケジュール・サービス 21

[ワ行]

- ワークロード管理キュー設定 17

[数字]

- 3 桁の区切り記号 31

D

- 「DataStage アドミニストレーター」ウィンドウ 29
 - 「全般」ページ 3
- DataStage エンジンでのトレースの有効化 20
- DataStage ディレクターでのジョブ管理の有効化 12
- DataStage ユーザーの設定 17, 19
 - 「DataStage リポジトリ・インポート」ダイアログ・ボックス 9
- DatsStage エンジンのトレース 20

I

- InfoSphere Information Server エンジン
 - コマンドの発行 5
- InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行 5
- InfoSphere® DataStage® 27

N

- NLS オプション
 - サーバー設定 32
 - プロジェクト設定 29
- NLS (各国語サポート)
 - 概要 29
 - クライアントおよびサーバーのマップ 32
 - マップ 29



Printed in Japan

SC43-0982-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21